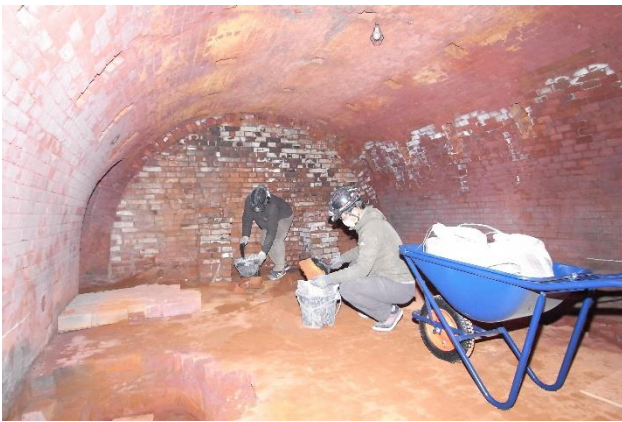


ホフマン通信

—「国重要文化財☆日本煉瓦製造株式会社旧煉瓦製造施設」保存修理情報— 第4号

◎ホフマン輪窯6号窯の保存修理工事が始まりました。

平成31年3月7日から、まずは窯内に積もっていた土砂の除去作業に着手しました。窯外に搬出された土砂は約8トンに達しています。



焼成室の土砂除去作業

◎覆屋の仮設工事

工事ではホフマン輪窯6号窯の覆屋を全解体します。そのため、工事期間中の風雨から輪窯を守り、天候の影響を受けることなく工事を進めるため、全長約61m、幅約28mの素屋根（仮設の覆屋）を設置します。



素屋根基礎の設置状況



素屋根小屋組みの架設

◎窯内部の仮設工事

工事中に煉瓦が崩落する危険性もあるため、窯内部には仮設のサポートを全体に設置しました。これにより作業員の安全性を確保し、作業を進めていくことができます。



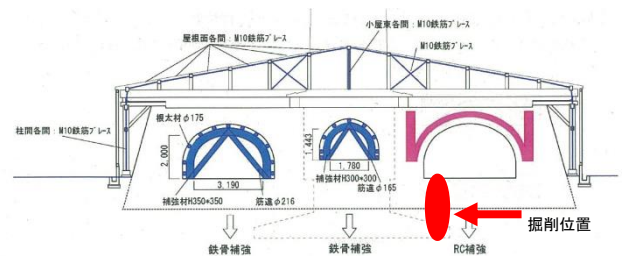
窯内部のサポート設置

◎煙突基礎の確認作業

窯・覆屋と同様に、煙突の基礎についても正確な図面はありません。高さ40mにも及ぶ煙突の安全性を確保することは、今回の工事の中でも重要な点です。そこで、煙突基礎の状況を確認するために、窯内部を一部掘削しました。掘削の途上

では、以前に今回掘削位置のほぼ反対側で確認されていた地下の暗渠状遺構が確認され、この遺構は焼成室の床面下を全周する可能性が高くなりました。暗渠状遺構の目的は、空気の流れを作ることによって湿気が上がってくるのを防ぐことにあると推測されますが、類例がないためはつきりしません。

暗渠状遺構の下部は煉瓦屑を含む土砂で埋められ、床面から約2m下からコンクリートの煙突基礎を確認しました。煙突基礎の規模や位置、深さは、過去の図面に描かれているものとほぼ同じでした。また、煙突の平面は円形ですが、その基礎はどうやら八角形のようなようです。コンクリート打設時の型枠となった板材の痕跡もみられます。今後、このコンクリートの厚さと鉄筋の有無を確認していきます。



煙突基礎確認のための掘削位置

◎煙突基礎をめぐる課題

この煙突は元々煉瓦造でしたが、1923年(大正12年)の関東大震災の時に上部が倒壊し、その後現在のコンクリート造で再建されました。震災後の写真では、煙突付近の覆屋屋根が破損しており、倒壊した煙突の落下によるとみられます。その際には、煙突付近の窯もかなり破壊されたことでしょう。再建された範囲については、煉瓦の積み方を調べて、明らかにしていく予定です。

写真では、被災時に煙突の下半部が残っているため、ある部分から再建された可能性もあります。また、当初の煙突が基礎から煉瓦造だったのかという疑問もあります。すなわち、煙突の基礎が再建の際に打ち直されたのか、当初からコンクリート基礎だったのかということです。これは、技術史的な面から重要な課題と考えられます。

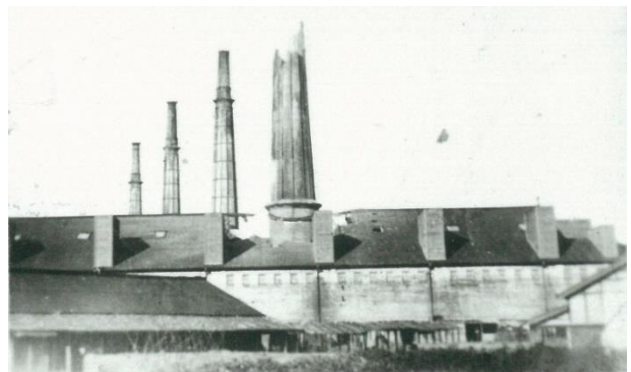


煙突基礎確認のための掘削状況

(断面に見えるのが暗渠状遺構、最深部に見えるのが煙突基礎)



コンクリートの煙突基礎



関東大震災時の煙突倒壊状況

編集：埼玉県深谷市教育委員会文化振興課
発行：2019年(令和元年)7月29日